

特 集

「農」で生きるため

今日から「起農」

「最高の仲間」がいる。
そういう環境の中で、農業を
始めてみませんか。

きのう



そんな中でも、平戸市には農業を志し、生業にしている若手農業者がいます。家業を継いだ者、新たに就農した者。さまざまな職業がある中、農業で生きていこうと決断したのです。

若手農業者の皆さんは、大きな希望を胸に、最高のものを作ろうと日々挑戦し続けています。明るい未来を見据え、自分の夢を追いかける姿は凛々しさを感じます。

今回は、平戸市を舞台に、農業で頑張る若手農業者を通して、農業の魅力を紹介します。

活躍する若手農業者

27年の平戸市の農業就業者数は1,931人と20年前に比べて約57%減少しています。（右図参照）

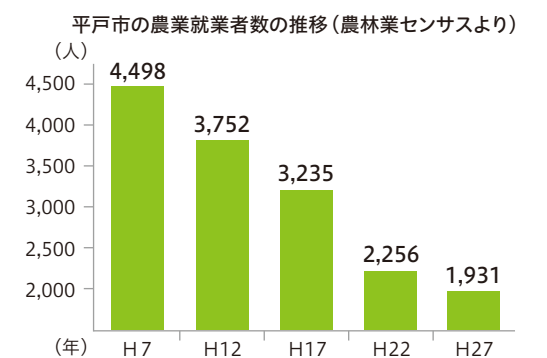
今後も、減少が続くと予想されるため、1人でも多くの担い手を確保し、将来の「食」や「くらし」、そして地域を守っていくことが喫緊の課題となっています。

平戸市では米はもちろんのこと、葉たばこ、イチゴ、アスパラガス、露地野菜、繁殖牛など、さまざまな品目が生産されています。

しかし、農業は少子高齢化に伴い、全国的に担い手不足という問題を抱えています。高齢化率が高い平戸市では、さらに深刻な状況です。平成

皆さんの「食」や「くらし」。それを支える安全でおいしいものの多くは、農家の皆さんの手で作られたものです。

農業の担い手不足



— 家族で奮闘中 —



1 現在は、一家4世代で暮らしており、葉たばこ(190a)と米(100a)を耕作する傍ら、繁殖牛3頭を飼育している。2 家に隣接する倉庫で、収穫してきた葉たばこの出荷作業を行う。3 倉庫前で無邪気に遊ぶ3男。将来の跡継ぎ候補。



手摘みで収穫する松山さん。夏場が収穫のピーク。

が入らないため、収穫は手作業で行われています。「唐津や県内の他の産地は、機械で収穫しています。手作業でやっているのはここぐらいじゃないですかね。収穫は中腰で行う重労働の作業なので、高齢の生産者はきついと思います。今後は、基盤整備を行い、機械作業に切り替えていかないと、このままでは跡継ぎはいなくなります。そのためにも、俺ら若手が声をあげていかないといいません。自分の子どもの代に少しでも楽にさせてあげたいですからね」と未来を見据える松山さん。

「収穫時期は大変ですが、
島での暮らしは充実しています」



まつやま 松山剛輝さん(28歳)・・・体を動かすことが好きで、村内のスポーツイベントには欠かさず参加している。趣味は釣り。休みの日はもっぱら魚と格闘している。

挑 戦

新たな風を

大島村に戻り、跡を継ぎ活躍する若者。
地域の農業を盛り上げるべく、日々奮闘している。
島の未来のため、子の未来のために。

充実した暮らしを送る

大島村の大根坂地区。海を見下ろす高台には、大小さまざまな「葉たばこ畑」が広がります。大島村では約70年前に初めて葉たばこが栽培されて以来、現在では16戸の農家が精力的に経営を行っています。

そんな葉たばこ農家の4代目として活躍するのが、松山剛輝さん。松山家は現在、親子3代で一緒に畑に出ています。

松山さんは専門学校に進学するため1度大島村を離れましたが、結婚

を機に戻りました。「いつかは跡を継ぐと考えていたので、島に帰るのに迷いはなかったです。ただ、予定より少し早かったですけどね」。現在は4人の子宝にも恵まれ、充実した暮らしを送っています。父の浩幸さんは「島のためにも家のためにもなるので、帰ってきたことは素直にうれしいですね」と目を細めます。

未来のために

松山さんが管理する畑は32カ所。大島村のほとんどの畑は大型の機械

地域とのつながり

大島村は、地域住民とのつながりが強い地域であり、松山さんも青年団の活動などに積極的に取り組んでいます。「農業だけでなく大島村全体を盛り上げたいので、いろんな活動に率先して参加したい」と熱く語ります。

最後に「これから暑い時期になり収穫は大変ですが、俺ら若手が頑張らんとすね」と汗を拭いながら笑顔で話す姿に、今後、大島村に新たな風が吹きそうな予感がしました。

葉たばこ



葉が黄色になったら収穫時

葉たばこは現在、全国の32県で耕作されており、長崎県は農家戸数全国7位、耕作面積全国5位の産地。

長崎県における産地は、平戸市をはじめ、南島原市、島原市、大村市、五島市、杵岐市、松浦市の7市。

平戸市内では大島村の16戸の農家が栽培しており、平成29年の販売額は約1億4千万円。繁殖牛、ばれいしょなどの農産物と並び、大島村を支える重要な基幹作物となっている。



大島村大根坂地区の葉たばこ畑。海をバックにきれいな景色が広がる。

るので本当に心強いです」と話す松山さん。お互いの知識を包み隠さず共有し、協力しながら栽培しています。これが葉たばこの品質に表れ、県内でも高い評価を得ているのです。このように、皆が大島村の葉たばこ農業を盛り上げるという同じ目標に向かって助け合っています。

仲間との交流

平戸市には葉たばこの他にも、繁殖牛やイチゴ、アスパラガスなど、さまざまな部会があります。どの部会

も、みんなで意見を出し合い、情報を共有しながら積極的に活動しています。

また、青年部や女性部の活動も盛んで、生産品目の枠を超えた交流が図られています。普段あまり交流がない人たちと触れ合うことができ、違う視点からの知識を得ることができています。

農業は1人でするものと思われがちですが、多くの仲間に支えられています。苦しいときもつらいときも、一緒に乗り越えてくれる仲間がそばにいます。



同じ葉たばこ農家の、川久保さん(左)と柴山さん(右)と談笑する松山さん。特に若手の

仲間とは、仕事のほかプライベートのことなど何でも話し合える仲だ。

ー 同じチームとして助け合う ー



Interview
「メンバー全員仲が良く何でも相談できる」
川久保 晃 さん (40歳)

大阪で仕事をしていたのですが、家業を継ぐために6年前に戻ってきました。

数年に1回研修で県内外の産地に行き、いろんな人の話を聞くことができます。その中で、頑張ったら高収入になるという話をよく耳にするので、そういう話を聞くとすごくやる気が出てきます。

葉たばこのメンバーは本当に仲が良く、何でも相談に乗ってくれます。このメンバーで知恵を出し合いながらこれからも頑張っていきます。



Interview
「横のつながりが強くチームとしてやっている」
柴山 嘉和 さん (43歳)

葉たばこは夏場がピークで、作業が朝4時から夜9時ぐらいまでなる日もありますが、自分のイメージどおりに栽培できたときはとてもうれしいですし、楽しみでもあります。

葉たばこのメンバーは、横のつながりがしっかりしていて、チームとしてやっている感じで頼もしいです。中には跡継ぎがない農家もあります。これから活気を出すためにも後継者が帰ってきて、葉たばこ農家を継いでくれたらうれしいですね。

家族のような雰囲気

大島村には平地が少ないため、大規模な畑はありません。他の産地と比べると、非常に条件が悪いと言えます。しかし、大島村には他の産地にはないものがあります。それは「団結力」です。

大島村の葉たばこ農家の皆さんは、家族のようにみんな仲が良く、何でも話し合えるそうです。

「分からないことは何でも先輩たちに聞きます。先輩たちも嫌な顔ひとつせず、快くアドバイスしてくれ

「知恵を出し合いながら技術力を磨く」

私が葉たばこを始めた当初は40戸ほどの農家がありましたが、現在では16戸と寂しくなりました。しかし、少ないからこそみんな仲が良く、知恵を出し合いながら所得向上に向けて取り組んでいます。

おかげで大島村の生産者は、県内でも技術力が高いと評価を受けており、葉たばこの品質はどこにも負けないと自負しています。これからも上下関係なく意見を出し合いながら、切磋琢磨していきたいと思っています。



Interview
大島葉たばこ生産組合長
永井 敏嗣 さん



葉たばこ生産者が集まり、酒を交えながら定期的に情報交換を行っている。

仲間

1人じゃない

農業をするうえで、仲間は大切な存在。

平戸市では、品目ごとに部会や青年部などの組織が充実している。情報を共有しながら、取り組める環境がそこにはある。



1頭1頭愛情を込めて世話をしている。

「最高の環境の中、牛を育てることができる」

家の跡を継いで7月でちょうど1年になります。今は親牛が46頭、子牛が25頭いて、毎日世話をしています。

生月の草原は海が見えて静かな場所なので、牛を放牧するには絶好な場所ですね。こういう環境の中で牛を育てられる地域は、他にあまりないと思います。

もちろん牛を育てるのは楽ではありませんが、自分が頑張った分だけ返ってくるので、とてもやりがいがあります。

今後は親牛が100頭になるぐらいに増頭したいです。ゆくゆくは、全国和牛能力共進会の県代表になるような牛を育てたいと思っています。

Interview



繁殖牛
みつやま ひろかず
蜜山 弘和 さん (28歳)
(生月町)



現在は、秋の定植に向け苗を育成中。

「農業で十分に生活できる」

平戸のイチゴ農家はつながりが強く、県内でも一目置かれるほどです。互いのハウスをみんな回って勉強したり、情報交換なども盛んに行うなど、切磋琢磨しています。

イチゴ農家は、ビニールハウスなどの先行投資はありますが、やる気次第で稼げるので本当にやって良かったと思っています。

出荷時期の2カ月ほどは休めない日が続きますが、その他は割りりと自由に休みが取れることも魅力の1つですね。

こんな田舎でも農業で稼いでいます。将来的にも平戸で十分生活できることを伝えたいですね。

Interview



イチゴ
くりはら はじめ
栗林 初敏 さん (34歳)
(朶の原町)



今年の3月にハウスが完成し、アスパラを定植した。

「オンとオフがはっきりしているのが魅力」

もとは違う仕事をしていたのですが、アスパラで儲けたいと思い、迷いなくこの道に進みました。

アスパラは単価が安定しているのが、安心して取り組めるのが魅力です。また、農協の出荷体制が整っていて自分のペースで作業できるのも良いですね。

ビニールハウスの中は暑く、夏場の作業はつらいですが、ピーク時は休めないですが、やった分だけ儲けるので頑張れます。逆に冬場はあまり作業がないので、自由な時間が作れます。

オン、オフがはっきりしてるところも魅力ですね。

Interview



アスパラガス
たなか まもる
田中 守 さん (27歳)
(野子町)



この時期は、キャベツの収穫で慌ただしい。

「おいしかったと言われたときが一番うれしい」

長男でもあるし何もしないと畑が荒れるので、大学のころに跡を継ぐと決心しました。農業を始めて、私で4代目になります。主に夏場はキャベツ、冬場は白菜などを作っています。

露地野菜は植えた後、出荷するまでの管理が難しく大変ですが、食べた人から「おいしかったよ」と言われたときは本当にうれしいです。

今は、ながさき西海農協の青年部長を務めているので、仕事以外も忙しいですが、合間を見つけてバイクでツーリングに行つて気晴らししています。自分にはこういう仕事に合つてると思いますね。

Interview



露地野菜
うちの けんいち
内野 恵一 さん (32歳)
(田平町)

同志

若手の同志

農業を生業にしている若手農業者は多い。
現在、それぞれの分野で担い手として活躍している。
将来の平戸市の農業を支える頼もしい存在だ。



頑張る若手農業者

葉たばこ以外にも、平戸市には農業で頑張る若手農業者が多くいます。誰でも最初は、経験も知識もありません。みんな、師匠や先輩などからアドバイスをもらいながら、一途に頑張っています。その成果が実り、今では期待の担い手として活躍しているのです。

今回は、4人の若手農業者に話を聞きました。皆さん生き生きとした素敵な笑顔が印象的で、充実した仕事ぶりが伝わってきました。

新規就農者を確保するため、市や県、農協、関係団体などには、補助金などの支援制度があります。また、熟練生産者からの指導や、各種部会における活動も盛んに行われるなど、側面からのサポート体制も整っており、いつでも新規就農者を受け入れる準備ができています。

皆さんも応援を

農業は自然が相手であり、決して楽な仕事ではありませんが、自らの力で未来と希望を引き寄せることができます。伸びしろの大きい魅力的な職業です。しかし、就農を考えている皆さんにとっては、不安や孤独さは計り知れないものがあります。その不安や孤独さを少しでも和らげるため、市内で頑張る若手農業者を紹介しました。

農業をする上で、地域とのつながり、人と人との関わりは避けて通れません。皆さんの温かい応援が、担い手の確保・育成につながります。

毎日の「食」や「くらし」、また将来の「平戸市」を思い浮かべ、ぜひ農業を応援してほしいと思います。

支援

夢を支える

どの分野にも生産者に対して指導・サポートする人たちがいる。

市や県、農協、関係団体などでは、新規就農者への支援制度が充実している。

夢を追いかけるための、サポート体制も万全だ。

私たちがサポートします

Interview



西九州たばこ耕作組合
販売技術部長
いまふく ひろし
今福 浩 さん

葉たばこは豊作貧乏もなく、仲間と共に喜びを分かち合える作物であることが魅力のひとつです。大島村は、一つ一つのほ場が小さいなど、条件にハンデがありますが、後継者が多く品質も良い葉たばこが生産されています。

今後も農家間での交流と栽培技術などの議論を積み重ねて、若手の皆さんが大島村を牽引する後継者グループとなることを期待しています。



ながさき西海農業協同組合
平戸営農経済センター長
つじもと えいいち
辻元 栄一 さん

農協では総合事業として、多面的に農家の皆さんの営農や生活のサポートをしています。

平戸市は、県内でも各作物別の部会活動が活発な地区で、営農指導員や熟練の生産者も参加し、新規就農希望者や若手農家の皆さんへの情報提供・共有を積極的に行っています。また、青年部や女性部の活動も盛んで、生産作物を越えた交流が図られています。



長崎県北部農業共済組合
NOSAI 平戸松浦支所長
やまかわ よしのり
山川 義徳 さん

農業共済組合では、自然災害などのリスクに備えるための公的な保険制度（農業共済や収入保険）にかかる支援を行っています。

作物・家畜・園芸施設に損害が生じた場合に「備えあれば憂いなし」ですので、ぜひ加入し、経営の安定を図ってほしいと思います。また、若手農業者が、今後、地域のリーダー的存在になれるよう期待しています。



長崎県県北振興局
農林部北部地域普及課長
ばんどう ひろみつ
坂東 弘光 さん

県では、意欲ある就農希望者を募集しています。担い手の確保を目指し、就業の準備段階から定着まで切れ目ない支援を行っています。

例えば、新規就農支援センター（就農相談のワンストップ窓口）からの情報発信。就農前には実践的な農業研修の支援、就農後は定着に向けたフォローアップを実施するなど、安心して就農できるよう、関係機関と共に取り組んでいます。

新規就農者に対する支援制度や「平戸Nova（ノーバ）」の紹介

《 支援制度 》

平戸式もうかる農業実現支援事業

■就農準備支援給付金事業補助金

就農希望者の技術・経営などの実践研修に対する支援

■経営開始給付金事業補助金

研修を受けた新規就農者の経営開始に対する支援

■中核的経営開始型支援事業補助金

園芸用施設および肉用牛施設の整備に対する支援

※詳しくは下記までお問い合わせください。

お問い合わせ先 農林課農務畜産班 ☎内線2243

《 「平戸Nova」について 》

市では、新たに農業に取り組み始めた若者などを紹介した冊子や、ホームページを作製し、情報発信に力を入れています

冊子



ホームページ



<https://www.hirado-nova.com/>

「未来の平戸市を支える手助けを」

Interview

農業は私たちの生活の基盤を支える重要な産業であるため、市では、頑張る担い手の支援に力を入れています。

今や、若手農業者は全国的にも貴重な存在であり、彼らを支えることが地域を、そして未来の平戸市を支えることだと思っています。

特に、これから農業を始めたいという皆さんのサポートや生産振興に力を入れ、平戸市の活性化を図っていききたいと思います。

市では、補助金などの支援制度を充実させていますので、就農を検討している皆さんは、何でも相談してください。私たちと一緒に頑張りましょう。



平戸市農林水産部
農林課長
三好 泰彦
みよし やすひこ